

ブータンと佐渡から考える幸せのかたち —国民総幸福（GNH）社会の実現過程—

河合 明宣

1. はじめに

1-1. 西岡京治氏のブータン農業発展への貢献

8月28日、南のチラン県庁を朝9時にたつて夕方6時頃ティンブーに戻った。西岡京治氏¹が国王の命をうけて1976年から1980年まで携わったシャムガン県のケン地区開発を見学した帰りである。ケン地区開発は、照葉樹林帯における焼き畑民を灌漑水路建設と水田造成を通して水稻栽培を中心とした定着農耕民に変え、さらに野菜や改良トウモロコシ栽培などを普及させたブータン農業発展の歴史において極めて重要な場所である。

毎晩激しい雨が降り、朝方にもまだ雨が残っている時期の照葉樹林帯の中を車で走った。手つかずの大きな木が茂る照葉樹林の森は、雨の中では黒い塊のように見えている。いったん、雨が上がればキラキラと太陽光を反射する大きな緑の塊が、盛り上がり覆いかぶさるように迫ってくる。まるでその塊は成長して大きくなりながら近づいてくるような感じさえ受ける。エネルギーに満ちあふれている。際立つ緑の塊の中では、太陽光を通した植物生産のすがすがしい生命の力をチャージでもできるかのような錯覚すら覚える²。

ティンブーに戻った翌29日、午前11時のバンコック行ドルック航空便でパロを立て、バンコックに現地時間午後4時に着いた。同日の夜行便に乗り、30日朝6時に成田に着いた。成田もまた雨であった。

成田から東京駅までの成田エクスプレスの車窓から、丘陵地帯の小さな沢を開いた谷地田を幾つも横切って眺めていると、一昨日まで見ていた緑の塊が頭に浮びあがってきた。西岡氏がブータン農業の基礎を築いた拠点となったパロ農場周辺では水稻は黄金に色づき、刈り取りも始まっていた。成田でも刈り取りが始まった。その谷地田を取り囲む丘陵の緑の塊は、照葉樹林であることに気づいた。成田空港からビル群に覆われた都市部までの間に存在する谷地田と丘陵の水田風景は、ブータンで見た水田風景と類似している。「里山、集落、水田/畑地、モンスーンの雨のセット」が共通項である。里山は、照葉樹が主要な樹木となって構成される。ブータンもわが国、特に西日本は、照葉樹林地帯に属しているということが、今回ブータン農村滞在後、時間をおかずに成田丘陵の水田風景を見たことで、自覚された。

ガイドのカルマ・ドルジさんは、オグロゾルの越冬地であるファブジカが属するワンディポダン県の南に隣接するチラン県に5エーカー程の土地を所有している。ブータン王国が定める家族人数の増加に基づく土地譲渡を申請して認められた土地である。土地は国王からの譲渡であって申請者は場所を選べない。譲渡を受けた土地の標高は1500m程で、

照葉樹林帯に属する。

この地域は、1985 年改訂国籍法制定、1989 年ディグラムナムザ（礼儀作法）法の励行等による国民統合政策を背景に、1990 年代後半から、ブータンに住むネパール系住民による反対デモやそれに対する取締がエスカレートし、暴力を伴う紛争が続発した。これが原因となりネパール系住民がネパールへ去った跡地へ入植するのである。国連が調停し、ブータン政府は国籍条項を満たし、帰国を希望する者を受け入れているが、大半はブータンに戻らず第 3 国への難民として受け入れが始まった。

ネパール系住民の去った土地と農地は、モザイク状に散らばっている。その土地が割り振られることになる。周囲には、ネパール系住民が生活している。農村地域を維持するのに一定の人口が必要となる。また、ネパール系住民とブータン人との人口比率を一定に維持するための移住である。これは、公共事業・居住 (Labour and Settlement) 省の事業である。

カルマさんが得たのは、道路下、斜面で棚田に隣接する約 5 エーカーの土地である（写真 1）。農地は造成されておらず、道の下には 4~50 センチ程の常緑広葉樹が茂っている。斜面の下方は、直径約 20 センチ程の疎林で見通しがよくなっている。6 畳程度の簡単な平屋が建っている（写真 2）。家族人数増加による生計維持目的で申請した土地は、農地として 10 年間は自らが耕作することが条件となっている。2、3 年前に、カルマさんと一緒に旅行していて、携帯電話で頻繁に話して落ち着かない時があった。譲渡された土地は自作せねばならないが、雇いあげた若者に任せていることが問題となり、調査が入っていて没収されるかもしれないと深刻であった。しかし、没収は免れた。ガイドを退職したら、大工を



写真 1 隣接する棚田

雇い周辺の住民に手伝ってもらって家を建てて、ここで生活すると言っていた。そういうこともあってかカルダモンの栽培を始めていた。

3 年目には収穫できるという小屋の周辺にカルダモン³を植えつけている。葉が扇のように広がっている。株から出た葉柄の根元に実がなる。完熟して弾ける前に採集して薪など燃やして種を乾燥する。乾燥した種は香辛料として食用にする。古くから商品作物として高い価格で売買される。薪炭による乾燥は森林に負荷がかかることで政府が栽培に消極的であったことや、病虫害で一帯のカルダモンが全滅したことがあったと言う。農家の現金

収入確保が一層重要な政策課題になる中で、商品価値の高い作物栽培が奨励され、傾斜地のオレンジの果樹園等の中に植えられているのをよく見かけた。

この地域では、雨季の水の確保は容易である。さらにカルマさんの土地は傾斜地で、水が湧き出ている場所がある。雨季の天水に加えこの湧水を使えば、棚田を造成して水稻栽培も可能である。下の方は疎林になっている。そうした場所に家畜を放せば、低木は踏み倒され草地化する。放牧場所を移動して、草の適度な生育を待てば、安定した草地として利用できる。半開墾状態の照葉樹林の中は疎林で明るく、林床にも十分光が入る所が多い。果樹を植え、その下で商品性の高いカルダモンを栽培するなど、多様な植物資源利用が可能である。しかも、木材が身近で入手できる。疎林であるので家畜放牧（林間放牧）が可能である。家畜が葉を食べる樹種も幾つかあり、驚く程木の葉が餌になっている。放牧を適度に管理すれば、ブッシュが無くなり草地になっていく。木の葉の飼料も加えれば、草地を含むこうした植生を効果的に利用して家畜が飼える。

手つかずの状態ではなかったが、照葉樹林に実際は入ってみると、植性の適度な粗密、日光の差し込む林床植生を含めた植生の多様さに応じた多様な利用が可能であることを知った。モンスーン気候下の亜熱帯と温帯気候区の植物生産性の高さがよく分かった。

1-2. 佐渡とブータンの共通点(1)：照葉樹林帯

アジアのモンスーン気候下の赤道付近の熱帯では常緑広葉樹林が成長し、熱帯雨林と呼ばれる。気温は緯度と標高に影響される。冬の気温が低くなる地域では、樹木は葉を落とす。ブータンでは標高およそ 1000m から 3000m（多雨の温帯地域）は落葉するまでにはいたらない常緑広葉樹林が卓越する。寒さに耐えるために葉が小さく、また厚くなり表面にクチクラが発達してくる。樹種は、常緑のカシ類、シイ、タブノキ、クス、ツバキなど表面に光沢のある植物である。根が深いため水源涵養林としての機能が強く、常緑のため林内湿度が高く、山火事への耐性がある。日差しを受けて、キラキラと照り返すために照葉樹林と呼ばれる。宮崎県綾町は、この手つかずの照葉樹林帯を保全して、地域振興に結び付けている。

熱帯雨林では、高さ 6～50m にもなる巨大な樹木にツタ類が絡まりつき、林内は極めて高い湿気となる。旺盛な植物成長のため、林床には日光が届かず下草が成長していない。マラリヤなどの感染症やトラ、ヒョウ、ワニ、象などの猛獣や大型野生動物が生息している。こうした熱帯雨林は、開発するにも生活するにも多くの困難が伴う。

一方、適度な気温と湿度に恵まれた温帯は、生活したいが容易である。熱帯雨林に比べて、照葉樹林は植生も粗であり、日光が差し込む林床には草地が出現する。そこでの牛などの林間放牧が始められ、家畜が踏み広げた場所を畑地化し、また焼畑を通して農耕を始めることができる。狩猟採集の生活から定着し農耕を開始するまでの地域発展の長いプロセスにおいて、生命活動の基礎になる植物生産力が極めて高い照葉樹林の魅力を具体的に感じた。

短い時間においてブータンのシャムガン県と成田空港周辺とにおいて照葉樹林を見たので、ブータンと日本の共通点は、「里山、集落、水田/畑地、モンスーンの降雨」であると気付いた。

2. 照葉樹林帯の開発と暮らし：焼畑から水田と里山景観への転換

2-1. 比較

シャムガン県では、1976～1980 年までに西岡氏によって灌漑水路が作られ水田化と野菜栽培が始まった（写真 3）。照葉樹林地帯において、家畜を飼い、焼畑で主にトウモロコシと陸稲の焼畑栽培を生業としていた人々が水稻栽培に転換することで定着化した農業を始めた。そして、地域発展の中長期施策として、オレンジ苗木が地域住民に配布され、植えられた。これは、照葉樹林帯における農耕の発展段階という観点からは、「雑穀栽培を主とした焼畑農耕段階」から、稲作が卓越する段階」への移行発展である（佐々木：121）。大きな変化であった。



写真3 西岡氏と地域の若者：パロ機械センター所蔵

照葉樹林帯に属する佐渡、特に小佐渡において、焼畑から水田造成を通じた稲作普及と薪炭林利用による里山発展の概略を、佐渡を 40 回以上訪ねた宮本常一が残した貴重な記録である『私の日本地図 7 佐渡』

と『講演選集 4 郷土を見るまなざし 離島を中心に』及び本間雅彦『牛のきた道—地名が語る和牛の足跡』からある程度、辿ることができる。照葉樹林帯における牛馬放牧と焼畑耕作という生業から水田稲作への転換の痕跡が、この二人の研究者によって佐渡の里山景観の中に今日でも見ることができると思われる。照葉樹林帯における水稻稲作の展開を知ることによって、里山管理と生物多様性保全における佐渡とブータン双方の課題を探る糸口にしたい。

2-2. 佐渡

宮本は、水稻栽培の導入による土地生産性の増大を、人々の生産と生活における大きな変化と捉えている。小佐渡西南端小木岬の宿根木は廻船を多く持っていた。海岸の狭い場所である虫谷に住む人たちは、宿根木に出かけて船乗りをして生計を立てていた。しかし、明治中頃には汽船が登場し廻船はすたれた。虫谷に住む人たちは、そこで北海道に出稼ぎに出た。昭和 25 年から 28 年にかけて山手の小木台地の畑を水田に切り替える工事を進めた。

「何よりも大切なことは地元の生産力をあげることだと考え、昭和 25 年から 28 年をかけ

て、台上の畑を水田にきりかえる工事をすすめた。山腹に横穴をほって水を取り、11.4 ヘクタールの水田をひらいたのである。しかもこれを共同耕作することにした。村の家々の財産がほぼ平均して特別に力のあるものもなかったから、このような事業に成功したのだらうといわれている。とにかく畑を水田にきりかえることによって、38 戸のものがおなじように米がくえるようになった。この事実は、古い村もやりようによれば新しくなるものであることを教えた。」(宮本:122)。

畑地に灌漑水路を引いて、水稻栽培を始めたことで地域の農業生産力は大幅に増大した。地域の農家は、出稼ぎに行かずに、38 世帯が共同しながら家族と生活することが出来た。国中平野を除いた佐渡の水稻栽培の発展は、畑地の水田への転換が主流であったと考えられる。畑地での作物づくりには家畜、特に牛の飼育が結びついていた。この小木台地は、牛の放牧も行われていた。

「小木岬の上は一面の台地である。ところどころに谷はくいこんできているが、中央の台上から、舌のような台地が南と北にのびて、海岸のところでは断崖をつくっている。この台地は水が乏しかったので、中世の終わりころまでは牧場であった。」(宮本:123)。

ブータンの照葉樹林帯では、今日でも林間放牧が行われている。佐渡における牧の研究を行った本間雅彦『牛のきた道』によれば、佐渡の気候帯においては乾燥するサバンナ等にみられるように草地が卓越することはない。降雨があり樹木が生育するので草地は形成されない。それ故、人による森林利用は、焼き畑でなければ牛馬による踏耕が最良の方法であったと本間は、推論している。

「近年の踏耕技法からいえば、畑地ができあがる何年かの期間は、囲いの中に牛馬を放す様子はまさに牧そのものなのです。日本の牧の初期を考えるには、プレリーやサバンナのような草原や平原だけを想像すべきではないという理由はそこにあります。また木の根株を掘り起こす開墾法などは、そのための専用鋤を製造する鍛冶技術がすすんだ時代以後のもので、それまでは、焼き畑でなければ、牛馬による踏耕が最良の方法であったと考えます。牛馬といっても、主として牛によったであろうことは、馬踏よりは牛踏の地名が多いことや、扱いやすさ、柵の作りやすさから考えてみても理解ができます。」(本間:146)。

水田の造成が始まるまでの畑地づくりは、焼畑によるか、または家畜を入れて踏耕によって作物栽培の場所を確保する以外には手はなかった。家畜による踏耕であれば、糞尿による地力補給ができるので、焼畑のように長い休閑期間を置かなくても、輪作できるようにもなる。

宮本による小木台地の描写は、ブータンの移牧を連想させる。移動が可能である生活圏

内においては、照葉樹林帯の林間放牧とある程度平坦で水利が得られ、標高が低い場所での水稲栽培を結合した多角的な経営が成立する。水稲栽培が出来る場所は、冬温かいので越冬する場所に適している。

小佐渡の小木台地での放牧と低地での水稲栽培の結合が次のように述べられている。生業空間において、放牧を行う夏の住居（夏居）と水田のある冬居を往復する生活は、ブータンの移牧である。

「北岸の大浦で聞いたところでは、小木岬の台上は 100 年まえまでは水田はなかったそうである。ほとんど畑であったが、その畑も実に粗放なつくり方で、大豆なら大豆をつくったあとはそのまま草の生えるにまかせる。その枯れたところに火をつけて焼く。そしてムギをまく。ムギを刈るとまた後を放置して草をはやす。その草をなぎたおして、2〜3 日ほして火をつけて焼き、そのあとに大根をまくというようにして、肥料はほとんどつかわないで作ったものだそうである。ところが台地と大地の間の谷には水があり、そこは田もひらけており、しかも水はありあまるほどなので、谷の奥の方から台上の裾の方へ水路で水をひいてきて田をつくる工夫をするようになってきた。

こうして台地の上にはだんだん田がふえてき、ことに北側の台地の末端に近いところはほとんど田になってしまうまでになってきた。私は大浦からその東の井坪を通して台地に上がり、小木まであるいたことがあったが、昔、牛をあそばせたというあたり一面に稲田になっていた。そしてそこにはこんもりと茂った森があり、森の中には社とこもり堂がならんでたっていた。こういうところへ来て祭りをおこない、おこもりをするほど、この台地の上は台下の人にとって意味のある土地であったのであろう。あるいは、昔はここに人が住んでいたのかもわからない。

羽茂の町に冬居というところがある。冬居があるのだから夏居もあるだろうと思ってきいてみると、夏居もそこから西北の方の台地の上にあったそうで、夏はその夏居にいて畑をつくったり牛馬の世話をし、冬になると冬居へもどって来て暮らしたものであるという。井坪の村もあるいはそういう村ではなかったのか。井坪から上がって、社のところまで来るまでの間に小屋がいくつか建っていた。それは夏厩（なつまや）といって夏の間、牛馬をつないでおく小屋であったという。

佐渡では牛馬を夏と冬、別の厩に入れて飼うことが多い。そして牛馬ばかりでなく人もまた、夏は台地の上で暮らすようなことがあったのではなかろうか。」（宮本：126-128）

佐渡は生樺付近を北緯 38 度線が通っている。しかし、暖流対馬海流の影響で高緯度にしては、気温は比較的温暖である。また、面積は 855 平方キロであり、最高峰金北山は、1,172 メートルである。一方、ブータンは 38,394 平方キロで標高は 100m からの 7,550m にわたっている。佐渡とブータンの面積比は約 1:45 である。ブータンに比べて、佐渡は面積が小さいが、標高差が大きい。谷や尾根が複雑な地形を作り上げている。大佐渡は冬季にシベリ

ア高気圧の影響で寒風にさらされ、降雪もある。一方、小佐渡は温暖である。小佐渡では、照葉樹林の植性に落葉広葉樹や針葉樹が混ざる植生である。

こうした地形において、放牧や焼畑を組み合わせ、山腹の斜面や台地を利用してきたものと思われる。それが水田化され、安定した生産力を産み出した。羽茂村で八珍柿（おけさ柿）の苗木が植えられ、1936年に北海道へ初出荷した。戦後、1951年に流通・販売は農協が担当する体制になった。傾斜地や条件の悪い水田におけさ柿栽培が広がっていった。今日では出荷時に渋抜きのアルコールが加えられ、甘くなり食べられる日が記載されている。小佐渡は温暖で、標高差があることから1日の気温格差が大きく、佐渡の稲作に加えて、おけさ柿、桃、ネクタリン、リンゴさらにイチゴ等多様な園芸作物を栽培する多角経営化した専業農家が出現している。農業協同組合のイニシアティブで加工や出荷の共同作業化が進んでいる。

トキと共生する水田づくりが全島の取り組みとして進められている。稲の減農薬・減化学肥料及び有機栽培化を通して、2014年に放鳥されたトキの3代目が野生で誕生した。

1970年代に始まった稲作減反政策によって、海岸線に沿う漁村に暮らす人々が徒歩で30分から1時間かけて登って農作業を行っていた谷あいの斜面に開いた水田が放棄されていった。しかし、2008年の最初の放鳥以後、トキと共生する島づくりの目標が島全体の合意になり、環境修復の助成を通して放棄された谷あいの棚田の復元やまたは水をためて水生生物の成長を促すビオトープ田が増加している。小佐渡が持っていた照葉樹林帯の高い植物生産性に基づく多様な生物をはぐくむ機能が回復しつつある。

2-3. ブータンのシャムガン県

照葉樹林帯は、農業生産に関して見れば多様な作物や果樹を育てる包容力を持っているといえる。佐渡の農業発展は長い時間をかけて達成された。しかし、ブータンは、第3代国王が鎖国政策を転換し、国際社会の一員としての国づくりを開始して以来、国民国家の政治的・経済的基盤を速やかに着実に固めることが不可欠となった。

ブータン南部では、インドとの国境は定められていたが、実質的に国境が維持管理されていたわけではなかった。南部はネパール系住民が入植し、家畜飼育と焼畑で生計を立てていた。しかし、地域における国境線の実質的支配は、新たに誕生した国民国家にとって重要な課題となった。こうした地域の一つとして、シャムガン県のケン地域があった。住民は、移動を伴う家畜飼育と焼畑で生計を立てていたが、1972年に飢饉に見舞われた。これが直接的契機となって、第4代国王が、ケン地域開発を決意し、西岡氏を責任者とした背景であったと考えられる。南部国境の実質的支配と地域住民の王国への帰属意識を高め、国民国家を形成する一つの試金石ともいえる重要性を持った事業であった。

このケン地域開発事業は1976年から1980年に行われた。佐渡の小木台地では、1950～1953年に畑地の水田化が達成された。宮本が指摘したように、畑地の水稻栽培化がもたした「地元の生産力」の効果は、ケン地域でも同じであった。水稻栽培によって、飢饉や貧

困におびえながら焼畑地を絶えず移動する生活から、定住化した安定した生活への転換を可能にした。

しかし、佐渡は地域農家の相互扶助で水田化し、共同作業で水稻を栽培した。ブータンは国家の重点事業として、国王の特別予算及びわが国の ODA を投入しての拠点地域開発であった。2 台のブルドーザーやランドクローザーが投入され、必要資材は、当時ブータン唯一の国外物資調達地点プンツオリンから直接搬入された。ブルドーザーは、自動車道路最終地点までトラックで運ばれた後、自ら道を押しかいて現場に向かった。5 年後に事業が終了してから長期間現地に保管され、自動車道路開通になってボンデ農場に戻された⁴。大型重機の投入、工具/農具等の道具類やセメントやパイプ、稲穀、オレンジの苗木等の必要資材は無償で配布された。重機の運転手等から現場の労働者まで事業に必要な労働力は地元から雇いあげられた。こうして水田化を中心とした地域発展についての何度にもわたる説明会と現地での雇用創出による現金獲得というインセンティブは、事業推進にとって重要であった。

1978 年ノーベル経済学賞者セオドア・シュルツが、インドやバングラデシュ等アジアにおける「緑の革命」技術の急速な進展について述べた伝統経済から貨幣経済化への転換におけるインセンティブの議論に繋がる。巨大投資と自給経済下の農民に対する貨幣経済化へのインセンティブである。ケン地域の農業技術上での重点作物は、水稻と改良トウモロコシであった。

このインセンティブに加えて、事業後の地域発展の持続性に関する西岡氏の計画性が改めて評価される。人材育成と現場での資材供給を含めた農業普及事業の展開である。

西岡氏は、事業に着手すると事業対象地域に存在した 25 の小学校から 5 年生程度の子供たち各 1 名をサルパン県のゲルフに集めた。そこで西岡氏が面会し、新たに 2 名を加え、総勢 27 名をボンデ農場に 1 年間の研修に送った。

現場では、灌漑水路を作り、水田稲作を開始した。この間の水田稲作技術指導は、ボンデ農場の初期から指導していた古参の数名を当てた。現地から募集され、ボンデ農場で研修指導を受けた 27 人の若者たちは研修修了後、現地に投入された。1980 年に事業が終了すると県庁に農業関連の職員として採用された⁵。

ボンデ農場研修に参加し、事業で工事・農業関連資材の倉庫・配給担当係を務めた T 氏 55 歳から、Tintibi で 8 月 24 日の夜に聞き取りをした。27 名中 T 氏のみ 3 か月の研修で現場に戻った。焼畑農業と西岡農法との違いを次のように説明してくれた。事業前は、陸稲は存在したが、水稻はなかった。トウモロコシ、そば、小麦、四国ビエとアワ等を栽培していた（写真 4、写真 5）。

畑を分割して、各々の畑では年 1 作であった。ただ、トウモロコシの次にコムギを作る場合は二期作となった。当時の焼畑は、次のようであった⁶。

雑木や木を刈り倒し、乾燥後、火を入れ燃やす。

・第 1 年目は陸稲。・2 年目は陸稲かトウモロコシ。・3 年目は、作物は無し。

- ・3～4 年目は、繁茂した草を燃やして、トウモロコシかヒエを収穫して、牛を畑に放牧する。
- ・5～6 年の後に最初に戻る。この間、これと異なった周期の焼畑の耕作をしている。



写真4 焼畑による土地利用（左、トウモロコシ）



写真5 焼畑での陸稲

こうした不安定的な自給自足的な農業を事業によって、斜面を平地(terrace)にして、水を引いて水稻栽培を普及させた。事業中、3年で収穫できるカルダモン栽培を奨励し将来の商品作物としてオレンジ苗木を配布した。また、長期的視点で、高価な香料が得られる沈香の苗木 3000 本を植えた。

インド国境近くは、平坦な地形で川幅が広く橋が無かった。地域の住民は渡したロープを手で繰りながら舟に牛や馬や人が乗り込んで渡った。または、橋のある場所まで大きく迂回しなければならなかった。西岡氏は、ツタのロープに代えてワイヤー用いて村人たちの手で作れる橋を架けた。生活道路、診療所や集会場等の整備も行った。事業は、総合的な地域開発であった（写真 6-1、写真 6-2、写真 7、写真 8）。

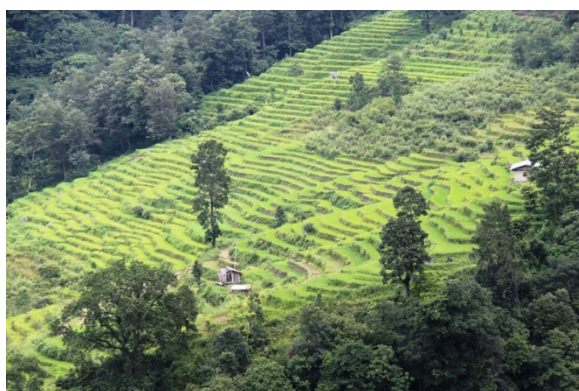


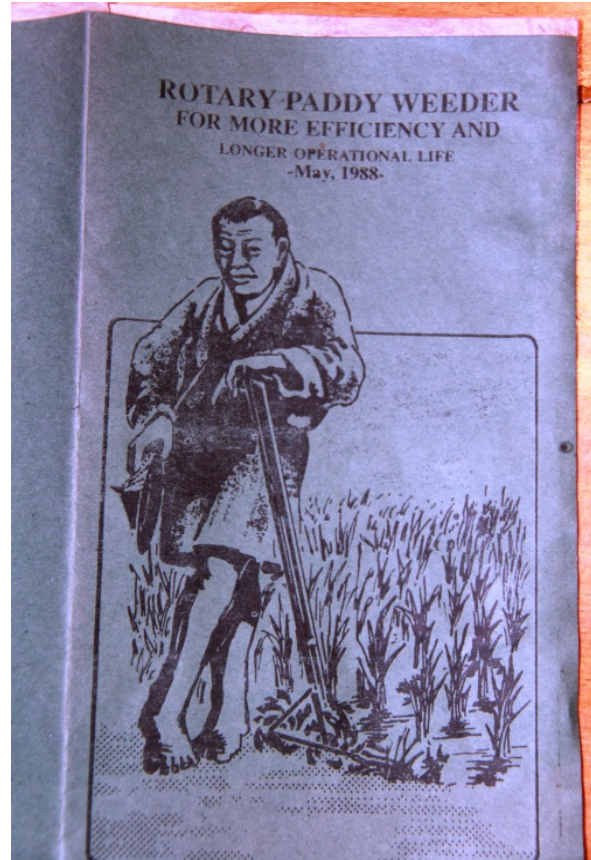
写真 6-1、写真 6-2 造成された水田



写真7 家屋敷の成立



図9 パロ機械センター西岡ミュージアム写真2 小屋とカルダモ写真8 日本農具の導入



3. 離島性

3-1. 比較：佐渡とブータンの共通点(2)：陸の孤島(ブータン)⇔離島(佐渡)

佐渡とブータンを比較して、照葉樹林帯が共通項⁷として有効な概念となるのではないか。それは人と自然の関係、すなわち農業を通した暮らしと生活の在り方、すなわち「里山、集落、水田/畑地、モンスーンの雨のセット」という観点における共通性を捉えることができるからである。

もう一つの共通点は「離島性」ではないかと思われる。照葉樹林帯が人と自然との関係を規定するフレームであるとすれば、「離島性」は、社会と政治を規定するフレームである。「離島性」は、距離による人、物、金、情報における交通が妨げられることから生ずる。こうして不便な交通は、全体と一部、島とを分けていく。

送り出す側か受け取る側か、どちらか一方がこの交通を操作する場合、選択されたもののみが島に入る。これをフィルター機能と呼べないであろうか。基本的には、受け取る側、島が必要な物資を選択する。しかし、送り出す側が交通を止めれば、島は何も受け取れない。物資の出入りが外部の選択で遮断されることもある。ブータンは自国の特質を、landlocked country であると説明している。地球上の全ての陸地が国家の領土である今日、自由に航海できる公海に接していない国家は、「陸封」されていると言える。これは陸封さ

れたイワナ等の表現で使われる。landlocked country は物資の出入りが封鎖された場合を懸念した表現と思われる。しかし、交通があれば受け取る側の島は、風土と歴史に適合したものを吸収・融合するという主体性、内発性を持つことができる。

グローバル化された外部と違った政治、経済、文化、歴史における固有性、アイデンティティの保持や形成にはフィルター機能の有無が不可欠であると考えられる。佐渡では中世以降、中央（本土）の政権から追放された人たちの送り込まれる島であった。例えば、世阿弥は、1434 年佐渡に流刑になった。これらは外部の選択によるものだが、江戸期になって金山労働力として大量に送り込まれた無宿者とは違い、追放された支配者階層に属した人の文化的影響は大きかったと思われる。政治的力は島に持ち込めないが、彼らが身に着けた知識、教養、文化、作法、芸術・技術などは、しだいに蓄積されてくるに従い島に大きな影響を与えていった。そういう影響下で廻船の船主や船頭たちも選択した文物を島に運び込むことは想像に難くない。こうして、自らの選択が可能となっていく条件が、育ってくると思われる。宮本のいう、「島社会の形成」は、島のもつフィルター機能による選択の蓄積に基づくといえる⁸。

3-2. ブータンにおけるフィルター機能

ブータンは、陸の孤島ともいえる。ロシア帝国・チベットと大英帝国の2大帝国の狭間に置かれた。かかる地政学的背景のもとで、トンサの地方領主が英領インド政府のチベットとの外交折衝に協力した。英領インドとの友好的な外交関係を背景に、他の地方領主を抑えて1907年に現王朝を樹立した。その後1949年に成立した中華人民共和国と1947年に独立したインド共和国との大国に挟まれた地理的隔絶という地政学的で位置におかれている。

第2代国王は、1926年に父親の後継者として即位した。1947年のインド共和国とパキスタンとの分離独立という、「激動するインド亜大陸の荒波を無事乗り切るための舵取りを」したのである。英領インドという統治枠組みが崩壊した後、インド共和国は、ネルーを首相とした国民会議派(コングレス)政権により連邦制下の議会制民主主義にもとづいて統治された。

国民会議派が圧倒的支持を得ていたが、野党をはじめ様々な勢力が蠢いていた。「第2代国王は、新生インドの諸々の勢力とも巧みにわたりあい、ブータンの独立を保ったのは、(略)深い知恵と、威厳、勇気を備えた外交官であり政治家であった」とペンジョー(6)は述べている。英領インド政府は、ブータンを内政には不干涉で、外交には助言をするという保護下に置いた。ブータンは、交易を続けるチベット以外の国とは外交を持たず、鎖国状態に甘んじていた。

しかし1952年に即位した第3代国王にとって、1959年のダライラマのインド亡命と1962年の中印紛争は、「人生および考え方に大きな影響を及ぼした事件」であった。中華人民共和国と大英帝国から独立したインド共和国の2大国の狭間で、「小国がかかえる悲劇的な弱み

が明らかになり、鎖国政策の抜本的な見直しが必要となりました。(略)もはや自分を取りまく外界の出来事とかけ離れた孤島ではありえないこと」を認識させるものであった。中尾佐助は、戦後初めてブータンを訪れた日本人であった。「何世紀も孤立の眠りを続けた静止の過去から・・・現代社会に現れ出」たブータン王国と形容している。

第3代国王は、ブータンは外に向かって向けて目を開き、独立国として、国際社会の一員としての役割と任務を果たすという決断をした。ブータン外交基本路線として、「徹底した非同盟で、安易に巨大国と外交関係を結んで、パワーゲームに巻き込まれ、その犠牲に」(ペンジョル:10) ならないという決意を持って国際社会に登場したのであった。

それを支える国民国家形成に向けて、国会及び国王諮問委員会、法律の成文化、司法の行政からの独立、自衛目的の近代的軍隊編成、土地改革等の内政改革を推し進めた。

第4代国王とGNH

第4代国王は、GNH 開発理念を掲げ、今日のブータン王国の形を作り上げて来た。第3代国王の死去に伴い1972年に17才という若年で王位を継承し、1974年に即位した。しかし、「既に、国内・国外で近代教育とともに伝統的な素養も身に着けた君主でした。殊にヒマラヤの王国という独自性を保つに必要な文化・制度にたいするきっちりとした理解を持ち合わせていました。」とペンジョル(12)は述べている。戴冠式演説にすでにGNHの考え方の基本的要素は、明言されていた。

「皇太子には、少年の気配はどこにも見当たらず、既に国民の信頼と信望を集める国王でありました。国民からの大きな期待に応え、国民の夢を実現するまでの道のりがいかに難しいかを説いたこの演説は、その認識の深さと雄弁さにおいて人の心を動かすものがありました。国王は、**開発と近代化、それと伝統文化の保存との調和を保つことが必要である**と説きました。**父国王の方針を継承しながら**、国民の期待に応え、**ブータンの自立**を計ることに全力をそそぐ覚悟であることを宣言し、ブータンの主権および自由を確立することを誓いました。それから今日にいたるまでの国王の政治は、この**演説の1項目、1項目を実現**していくことになります。

治世当初から、若い国王にはブータンの発展にたいする一つのはっきりとした考えと目標がありました。国王は、**もし物質的發展の名のもとに、伝統的文化が失われるとすれば、それは最も悲しむべきことであり、そうした発展はぜがひでも避けねばならない**という信条を持っています。(略) 国王の施政方針の根幹にあるものは、**物質的發展によって心の安らぎが損なわれるようなことがあってはならない、という固い信念**です。」(ペンジョル:13-4)。

国民総生産 (GNP = Gross National Product) ではなく、国民総幸福 (GNH=Gross National Happiness) であるという有名な語録は、上の演説のイメージを極めて抽象的に述べている。

後発国にとって工業化を推進するには、外国依存以外に道がない。それではブータンの自立が保てない。自力による経済開発とはどのようなことが可能か。戴冠演説で述べた物質的發展すなわち近代化・産業化は、伝統的文化との調和の上に築かれなければならないという揺るぎない決意と、それを実現させる国民国家の形成を長期にかけて指導したリーダーシップは、世界史において稀有のことと言える。

国王は 1971 年に創設された国家の計画委員会の委員長に 16 歳で就任し、1991 年 6 月までその任務を勤めた。経済開発は、5 か年経済開発計画（以下、5 か年計画）の積み上げにより進められた。国民統合では、基礎自治体＝地区（gewog）と県との二層の地方団体を持つ地方分権の制度的枠組みが整備された。王政から、議会制立憲君主制へと国家統治構造が大きく変化した。地方行政機構整備を踏まえた県―地区（gewog）による地方自治制は、2008 年成文憲法に確固とした位置づけらが与えられた。表 1 は、5 か年計画を軸に国民国形成が進められた概略を図示している。

表1 国民統合と経済発展		
5か年計画	経済発展	国民統合
第Ⅰ期 1961～1970年 第1次～第2次	インド・ブータン国道	1962年 コロンボ・プラン加盟
第Ⅱ期 1971～1980年 第3次～第4次	1971年 国家開発委員会設立 第4代国王委員長就任 1974年 森林保全政策 水力発電・観光業振興	1972年 第4次王位継承、 74年即位
第Ⅲ期 1981～2007年 第5次～第9次	1989年 国家環境委員会設立 (国家開発委員会の内局)	1981年 県開発委員会導入 1991年 地区開発委員会制導入
2002～2007年 第9次	4重点領域 ①経済発展 ②文化遺産の保全 ③自然環境保全 ④よい統治	2002年 地方分権関連法改正 2007年 国家開発委員会を改組し 国民総幸福委員会
議会制立憲君主制 2008～2013年 第10次		2008年 憲法発布、国会議員選 2009年 地方自治法施行
(筆者作成)		

第9次5か年計画の4つの重点課題

2002～2007 年までの第9次5か年計画の4つの重点課題は、①公正な経済発展、②文化遺産の尊重、③自然環境保全、④よい統治である。第9次では、第1次から開始された今までの5か年計画の成果が集約され、2008年の成文憲法に相応しい行政制度改革と経済開発の進展がみられた。「物質的発達によって心の安らぎが損なわれ」ないために、②文化遺産の尊重及び③自然環境保全が4つの重点課題の中に入っている。

発布された憲法の第3条は精神遺産、そして第4条に文化遺産、第5条に環境の尊重と

保護が謳われている。第9条には、全ての施策は、GNH 社会実現を目標にすると明記されている。その手段として、①経済開発（5 か年計画）、②国民統合のための地方分権化、③立憲君主制を規定した成文憲法（政党制・議会制・君主制・地方自治制）を通じた決定への国民参加なのである。

3-3. 佐渡におけるフィルター機能

宮本の佐渡への眼差し

次の宮本の文章は、佐渡という離島の持つフィルター機能をよく説明している。

「佐渡の城址といわれるものは、戦国乱世の頃この島にも多くの争いがある、そのためもうけられたものが多いと思われるが、平野の中にある館のあとはそれよりもさらにふろく、国府などにまなんで土豪たちが集落づくりをした名残をとどめているものではないかと思われる。とくに小佐渡の山麓地帯をあるいていると、この島がきわめて古くからひらけてきたところであること知る。それは村の在り方や道の在り方ばかりでなく、その地帯に古社寺の多いことでもうなずかれる。」(17)。

古社寺が多いことから、宮本は歴史を振り返る。

「そこが限られた島社会であるということによって、本土における政治や文化の変遷がいちいちこの島に反映しているばかりではなく、島で外敵によって社会秩序が急速に乱されることが少なかつただけに、古いものが意外なほど多く残っており、いわば日本の縮図をおもわせるものがある。」(宮本:15)。

佐渡の歴史の長さとそこから生まれてくる佐渡の人たちの人情や「島は理想的な生活完結体」と呼ぶところの相互扶助性をよく捉まえている。佐渡では、政治的な大きな断絶がなかったことにより、文化や伝統がよく保全されている。古社寺の多いことはこの点を象徴的に表している。

佐渡の神社について、『佐渡郡神社誌』(大正 15 年)によれば 292 社存在し、人口約 370 人(70 戸)に 1 社存在していたと言える。近世中期の『寺社案内帳』によれば、雑太・加茂・羽茂の 3 郡に 354 社を数え、村総数 263 に対しては、1 村当たり 1.3 社となるのである。「佐渡ではおよそ 1 村 1 社という伝統が近世中期から今日まで守られてきているということである。したがって祭祀の組織が基本的には著しく変動を蒙らずに現在に至っていることが推察されよう。」(九学会:203)。

こうしたことを背景に能楽堂が極めて多い。全国の能楽堂が佐渡に集中していると言える。宮本は、「島は理想的な生活完結体である。」とか、「佐渡は一つの生活文化圏をなしていたということを、今、実感している」と述べている(280)。離島発展における人々のまよりの重要性を痛感しているからではなかろうか。

『宮本常一講演集 4 郷土を見るまなざし 離島を中心に』を読むと、離島調査の初めから関わっている隠岐への言及が多いが、隠岐を話題にしても佐渡に話が飛ぶ。離島の中で、佐渡の現況と発展に対する考えは、もっともよくまとまっていると感じられた。

『私の日本地図 7 佐渡』では、佐渡に対する宮本の眼差しの深さと島の発展を若者たちと語ろうとする思いが伝わる。何度も何度も佐渡を訪問し、地方文書を読み、よく歩いて地形を掌握している。また、『牛のきた道—地名が語る和牛の足跡』の著者本間雅彦や島の若者たちに会って、島は農業を基盤として発展すべきであるとし、その長期的な確かな見通しを抱くようになっていく様子が伺える。

「羽茂へはたびたびいった。行くたびに愛着をおぼえてくる。この村の人たちはこころにくいまでのゆかしさをもっている。(略)このようなもてなしも、この土地の古い伝統によるものであろう。このあたりの村村にはほとんどと言ってよいほど能舞台がある。近頃はほとんどおこなわなくなっているが、戦前までは能はさかんであった。(略)今はあとをつごうとする若いものもいなくなったから、間もなくほろびるであろうと村の人は言っているが、そういうものが生きた社会にはゆかしさがある。そして話し込んでしまうと夜あけ近くになってしまうほど、皆話題も豊富である。このような気風はいかし続けたい。」(160)

4. 佐渡の課題と展望

4-1. ブータンの課題

第9次5か年計画の4つの重点課題は、①公正な経済発展、②文化遺産の尊重、③自然環境保全、④よい統治である。

佐渡とブータンとの類似性は、②と③に端的に表れている。①と④は、政治のリーダーシップに関連する。ブータンの発展は、国王の戴冠演説が実現されたことに示されるように、揺るぎない国王の上からのリーダーシップによってもたらされたものであった。

シヤムガン県のケン地区開発に見るように、地区住民の負担は皆無と言ってよく、村人のインフラ整備の労働には労賃が支払われた。こうした上からの開発では、地区住民は受動的となり、国王、国家に対する依存度は大きかったと思われる。こうした「国王だのみ」では主体性が育たない。このため、地域発展におけるグループや農協、NGO等の非政府組織の育成と成長が2013年から開始された第11期5か年計画の重点目標の一つになっている。

佐渡は離島という条件で島の社会的結合度が高いことと農協活動が活発であることは関連していると考えられる。ブータンは佐渡のこうした農協活動や、農業における農商工連携等を学ぶことが出来る。

4-2. 佐渡の課題

4年毎の地方自治体首長選挙と地方議会選挙というわが国の制度下では、投票者の短期的な期待が反映され、長期的な開発理念の下での経済発展を積み上げていくことは難しい。

佐渡はブータンから、長期開発理念の下での 5 か年計画の積み上げによる地域発展の手法等も学ぶことが出来る。宮本は次のように既に指摘している。

「さて、離島の新興をどのように進めるか。やはり原則は第二次産業の発展ではなく、第一次産業の発展でなくてはいけないと思う。種子島の場合は日本の南端にあるので、輸送費の面から見て、現状では大工場の進展はまず考えられない。基本はあくまでも農業におくべきだ。たとえば、西之表市街地の発展は、その後背地である農村部の発展がなければ絶対に伸びるものではない。全国のこうした形態の市街地には朝市というものが多くあるがここにはない。今後はかんがえて見てよいことだと思う。すなわち農家と商店が手を結び、共存共栄の精神で進まなくてはいけない。」（講演集：31）。

そうした農業の 6 次産業化や農商工連携は佐渡では既に実践している。農協組織を通しての農作業の共同化も進んでいるように思われる。佐渡は一つの生活文化圏である。必要である集团的結束や共同作業での実践は、長い歴史の中で何度も経験している。そうした経験が中長期の島づくり目標の下で生かされてくる。

また、宮本の眼差しである。宿根木の小学校の半分が空いたので、古い百姓道具を集め始めたらだんだん集まりだした。

「つまりいままであんなものというものを、これほど大事だと盛りたてていくことが起こってくると、地域開発というのは、ほんとうに成功しはじめる。そのためには、なにか芯になるものが必要です。芯になる人と芯になるものを通して、今度は外からどういうつながりを持つか。そのときはじめて、お互いの大きな反省がおこってくるのではないか。その反省が大事だと思います。

それが凝集した場合には、その凝集せられたものが自分たちの頭に描かれた夢の実現というかたちで存在してほしい。」（講演集：163）。

佐渡における島づくり、地域振興のリーダーシップは、地域住民自ら主体となって発揮すべきものであろう。それが、島の孤島性が保証するところの真の内発的発展なのである。

-
- ¹ 西岡京治氏、当時の海外技術協力事業団専門家として、1964年4月23日にブータンに派遣された。パロに開設した農場で、並木植えや寒冷地用の稲粃採用等の稲作改良、ダイコン、キャベツ、カリフラワー等の冬作野菜及びリンゴやオレンジ等果樹の栽培を研修・指導し、全国に普及させた。1983年、日本の政府開発援助（ODA）による無償供与耕耘機・組立て/配布及び修理技術/運転の研修、その他の農器具/農具の改良普及等を目的とした農業機械化センターを設置した（写真9）。
1985年には苗種センター設置し野菜種子の採種・配布を通じた冬作野菜栽培普及、食品加工部門は、インド、バングラデシュにまで輸出する果物ジャム等の食品加工をするまでに成長した。
1980年、王国に対する最良功労者としてのダショを授与された。しかし、1992年3月に59歳の若さでブータンにおいて逝去した。パロ農場を見渡せる丘に西岡氏の記念チャルテンが、氏が育てたブータン人後継者を中心にした人たちによって建てられている。
- ² 典型的な照葉樹林帯に入り、「深い谷をはさんだ対岸の尾根を見渡すと、モクモクと盛り上がった特有の樹冠をもつ照葉樹林がびっしりとその斜面をおおっていた。」（佐々木:126）。
- ³ 熱帯産で、ショウガ科の多年草。和名はショウズク。乾燥した種子は、カレー料理には欠かせない香辛料として利用される。
- ⁴ 2014年8月26日、TingtibiのRNR(再生可能自然資源)研究・開発センター主任へのインタビュー。
- ⁵ 1980年代には県行政機構改革が進み、学歴を加味した昇任、業務内容の見直し等により転職する者も現れた。大半は継続して勤務している。
- ⁶ 佐渡における農耕の在り方の一つに小佐渡山中のヤキハタおよび牧地帯がある(九学会:391)。
- ⁷ 「ブータン流に学べ GSHクラブ佐渡に発足」(『新潟日報』2014年2月14日)という見出しの記事に、GSH(Gross Sado Happiness)クラブは、GNHを目指すブータンに習って「ブータンと佐渡は似ている。」や「佐渡の魅力を生かし未来に繋げよう。」等と方針を語り合ったとある。
- ⁸ 宮本は、外部からの統治は、影響力の強いグローバル化要因と捉えている。赤玉集落で資料を調べた。「宮本はそのときの印象として、親方と名子（なご）のせいどや中途・重立ち制度の中世的な遺習や文化が残存しているのは、江戸期の封建的な性格のつよい社会のしくみに毒されなかったことの表れではないかと班員に語っている。」(赤玉部落誌編纂委員会『赤玉部落誌』(1995年、7頁)。

文献

九学会連合佐渡調査委員会編報告書(1964)『佐渡－自然・文化・社会－』平凡社

佐々木高明(2007)『照葉樹林文化とは何か』中公新書

田村善次郎編(2014)『宮本常一講演集 4 郷土を見るまなざし 離島を中心に』農山漁村文化協会

本間雅彦(1994)『牛のきた道―地名が語る和牛の足跡』未来社

ペンジョル、ロンボ・サンフエー(1994)『回想 三代国王に仕えて』ブータンの文化と自然の会

宮本常一(2009)『私の日本地図 7 佐渡』未来社

＊本稿は、放送大学新潟学習センター主催・佐渡市教育委員会共催の公開講座、2014 年 9 月 12 日、佐渡市真野ふるさと会館で開催された講演レジメを基に文章化した。講演と主旨は同じであるが文献等を補っている。